

シャイフ・ターイファ・トूसィーのガイバ論

吉田京子

はじめに

260/874年は、12イマーム・シーア派にとり重要な年である。この年、11代イマーム、ハサン・アスカリーが死亡し、次のイマームとなるべき息子ムハンマドが一般信者の前から姿を消し、いわゆるガイバ（お隠れ）の状態にはいったとされる。わずか四歳にして11代イマームの地位を引き継いだ12代イマームは、それ以降今日に至るまで、少数の側近を除く大多数の一般大衆からは遠ざかったこの状態に留まり続けている⁽¹⁾。260/874年の後継問題を機に、このようなイマームのガイバ説を採用することで12イマーム・シーア派は自派のアイデンティティーを確立する第一歩を踏み出したといえる。

イマームが人々の前から姿を消すという考え方は、イマームの死に伴う後継問題が発生するたびに幾度となく繰り返されてきたもので、シーア派においては特別新奇なものではない⁽²⁾。しかし彼らが主張した12代イマームのガイバは、従来のものとは異なる新たな問題を孕んでいた。

従来の主張は、それまでイマームとして現実社会で一般信者と直接の交渉を持ちうる存在だったイマームが死んだ際にその人物に対して主張されていた。死を境にそのイマーム性が終了し、新たな人物が次のイマームとされるのを嫌う集団が、イマームの死そのものを拒否する形でガイバの主張を展開するというものであった。

ところが12イマーム・シーア派の主張は、11代イマーム、ハサンの死に際し

て、彼の死を否定しそのイマーム性を支持し続けるというガイバ論の類ではない⁽³⁾。彼らは、未だその姿が公になっていないハサンの息子ムハンマドのイマーム性を新たに主張し、その上で彼のガイバを説いたのである。イマームとしての一般的な合意が確認されていない人物のガイバを唱えることはそれまでにはなく、そこには二重の困難があった。ガイバの議論をする前にその人物のイマーム性の正しさを証明する必要があるからである。以前のガイバの主張が結果的には、常軌を逸したグラートの教義と結びついたり、短期的な主張に留まり主張者集団自体が消滅したり、他派に吸収されるというような状況下で、彼らはあえて二重の議論を必要とするガイバ説を採用したのである。彼らの主張が派内外の厳しい批判にさらされたことは容易に想像される。彼らはそれらの批判に目を向け、それらに対し自説の正当性を証明するための様々な議論を展開したのである。

その中で、同派のガイバ理論の確立に最も貢献したとみなされているのが、シャイフ・ターイファ・トゥースィー - Abū Ja'far Muḥammad b. al-Ḥasan b. 'Alī al-Ṭūsī (385/995-460/1067 以下、トゥースィーと略記。)の『ガイバの書』*Kitāb al-ghaybah* である。シーア派のガイバ研究の第一人者であるサチェディーナ A.A.Sachedina は、同書をハディースの徒によるアフバーリーの手法とムタズィラ派の影響をうけたムタカッリムのウスーリーの双方を駆使した総合的なガイバ論と規定している⁽⁴⁾。トゥースィー以降、同派の信条としてのガイバの規定やその正当性の論証のいずれにおいても、トゥースィーの見解が基本的には踏襲されており、ここに同派のガイバ思想の確立をみてとることができるからである。

本論では、このトゥースィーの『ガイバの書』を分析し、そのガイバ論の諸特徴を明らかにする。

1 シャイフ・ターイファ・トゥースィー

トゥースィーは、シャイフ・ターイファ、つまり「イマーム派の長」という尊称で呼ばれる通り、11世紀のシーア派を代表する知的権威である。彼の幼少時代についてはあまり知られていないが、10世紀後半トゥース⁽⁵⁾に生まれ、スンナ派、シーア派を問わず多くの師から学問を学んだ。二十代で当時の学問の中心地バグダードを訪れ、そこで当時のシーア派の知的最高権威だったシャイフ・ムフィード *Muḥammad b. Muḥammad b. Nu'mān al-Baghdādī al-Karkhī* (d.413/1022) や、シャリーフとして高名なムルタダー *Abū al-Qāsim 'Alī b. al-Ḥusayn al-Mūsawī* (d.436/1044) らに師事し、シーア派、ムタズィラ派的知識を身につけた。彼らの高弟としてその地位を引き継ぎ、バグダードのシーア派を代表する碩学として広く認知されている。

しかし、当時のバグダードでは、以前のブワイフ朝による親シーア派的環境が徐々に崩れ始めており、シーア派とスンナ派間のこせりあいや抗争が頻発する不穏な状況にあった。バグダードでの彼の住居がシーア派の重要拠点とみなされ対シーア派暴動の標的となり、448/1056年に多くの貴重なシーア派文献とともに焼け落ちたことは有名である。その後はナジャフに移り、そこに12イマーム・シーア派の学問の中心地となるべき学所を新たに築き、460/1067年(458/1065年という説もある。)にこの地で亡くなっている⁽⁶⁾。

アルダビーリーは彼を次のように評している。

イマーム派の長老、同派の長、有能偉大で信頼できる人物、重鎮、誠実者である。伝承、リジャール、法学、法源学、神学、アダブの知に精通。あらゆる美德を有す。イスラームの諸分野について著作を執筆。⁽⁷⁾

12イマーム・シーア派におけるトゥースィーの知的貢献ははかりしれない。師であるムフィードの時代は「イマーム派の社会的、政治的、宗教的生活を導

くために必要な伝承の要約と体系化の時期に続く、これらのものを厳密な法理論へ従属させる時期」⁽⁸⁾であり、トゥーシーも彼らのこのような使命を踏襲している⁽⁹⁾。また、10世紀以前からの伝統的伝承学の立場にも理解を示し、ハディースの収集にも意欲的だった⁽¹⁰⁾。彼は理性を重視するバグダード中心の師たちの合理主義的立場と、伝統的で伝承を重視するコム中心の伝承学者の立場双方を統合することをめざしていたといえる。

2 『ガイバの書』の構成

トゥーシーは『ガイバの書』の冒頭で、この書の執筆をムフィードから要請された旨を伝えている。彼はそこで、ムフィードのガイバ論をもとに同派のガイバ思想を明晰で総括的に提示することが急務であると述べている⁽¹¹⁾。

ムフィードは既に『ガイバについての10章』*al-Fuṣūl al-'asharah fī al-ghaybah*において、自派のガイバ論に対して向けられた数々の批判の中から特に重要と思われる以下の10項目を選択し、それぞれに対して自らの見解を述べ、対応している⁽¹²⁾。

- 1) 12代イマームの誕生に対する疑問
- 2) 11代イマームの兄弟ジャアファルによる子供の存在の否定
- 3) 11代イマームの遺言状が母親にあてられたことによる子供の存在への疑問
- 4) 12代イマームの誕生の秘密化、ガイバの必要性に対する疑問
- 5) ガイバの一般常識からの逸脱
- 6) イマームの年齢の一般常識からの逸脱
- 7) ガイバの状況下でのイマームの必要性の否定
- 8) 同派のガイバと以前のガイバとの同質性
- 9) 神の恩寵の問題との抵触

10) イマームへの奇蹟の付与に対する疑問

これらの批判とそれに対する回答は、トゥースィーの『ガイバの書』に忠実に引き継がれ、このテキストの骨子となっている。

形式面においてもトゥースィーはムフィードの方法を継承する。彼は第一に自らの意見を率直に述べ、次にそれに対する反論者との批判的議論に応じるというやり方を採用する。「(反論者が) 以下のように主張する場合、我々は次のように回答する。」というムフィードの使用した問答形式を自らも採用するのである。その際に、長々と多くの情報を繰り返しあげることが極力回避する。トゥースィーは、ガイバに関する様々な問題点を網羅的に扱うことを心がけると同時に、それらに対する回答や自己の立場を端的で簡潔に表すことに腐心したのである⁽¹³⁾。これは、既存のガイバ論との重複を最小限におさえることで、自らのガイバ論が同派のガイバ論の総括として有効に機能することを目指した結果である。

このような姿勢は、ヌウマーニー **Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Ibrāhīm al-Nu'mānī** (d.around 360/971) やイブン・バーブーヤ **Abū Ja'far Muḥammad b. 'Alī b. Bābūyah al-Qummi** (d.381/991) などによるガイバ論とは異なる⁽¹⁴⁾。彼らのガイバ論は、先人の収集した関連伝承を最大限利用し、多種多様な伝承自体に自らの議論の正当性、ひいてはイマームのガイバ自体の正当性の論拠を見いだそうとする傾向にあった。彼らのガイバ論は、預言者やイマームに依拠するとされる数々の伝承で構成され、それらが提示されるのみであった。これらの伝承をガイバの正当性と結びつけるのは、信者各々の信仰心と知的努力に任されていたのである。他方、トゥースィーは所与の伝承からガイバの正当性を導き出す行程を自らのガイバ論で示すことにより、従来は信者個人に託されていた部分をも同派のガイバ論の中に組み込んだといえる。

トゥースィーは論点を以下の8点にしぼり個別の章で扱っている。

第一章 12代イマームのガイバの正当性

第二章 12代イマームの誕生

第三章 12代イマームの目撃証言

第四章 12代イマームの奇蹟

第五章 12代イマームの出現の阻害要因

第六章 サフィールについて

第七章 12代イマームの寿命

第八章 12代イマームの属性

第一章にはムフィードのガイバ観が直接反映されている。論理的思索によるガイバの正当化が試みられ、トゥूसィーのガイバ観が最もよく表れている。ここでの議論を軸に、第二章以降ではイマームのガイバに関する具体的側面が伝承を交えつつ考察される。

3 論理的思索によるガイバの正当化

トゥूसィーのガイバ論の最大の特徴は、第一章で行われている討論形式による論理的ガイバの正当化にある。トゥूसィーは、イマームのガイバの正当性は二つの論法で証明されうるとする。第一の論法は、イマーム論からの帰結として12代イマームの存在を正当化しようとするものである。トゥूसィーはシャリーフ・ムルタダーの議論に基づくこの論を次のように進める⁽¹⁵⁾。第一に、「イマームはいかなる状況においても必然的なものである。」「長となるべき人物（イマーム）は絶対的に無謬である。」「ウンマから真理がなくなることはありえない。」というイマーム論の基本的命題を確認する。

第一の命題はシーア派の一致した見解として認められる。被造物は不完全な存在であるが故に、長となる人物がいなければやっていけない。頑迷な者を退け、犯罪者を罰し、圧制者の力を押さえ、弱い者を守る存在がいけないことがどのような悲惨な状況をもたらすかは知性ある者には明々白白であるとトゥूसィー

は言う⁽¹⁶⁾。

さらに、そのような被造物の長としてのイマームには条件がある。それが第二の「絶対的無謬 ‘ismah」である。被造物がイマームを必要とするのは、自らが過ちを犯す存在であるからに他ならない。もしイマームが無謬でない場合、彼もまた過ちを犯さないとと思われる別のイマームを信頼し、彼に依拠する必要がある。しかし、その人物も無謬でない場合、彼もまた別の正しいと思われる人物に依拠しなければならなくなる。このようにして事態はそのような状況が永遠に続くか、または最終的に真に正しい一人の無謬な人物にたどり着くかのいずれかとなる。前者は我々被造物がイマームを必要とすることと矛盾するため誤りである。その結果として、後者の意見が正しいとされる⁽¹⁷⁾。

さらに、無謬なイマームが存在している限り、第三の命題である「ウンマから真理がなくなることはありえない」ことも真理とされる。

このことから、12代目のイマームは必然的に存在すると結論づけられる。この時点で、他派がイマームであると主張する実際の人物を観察すると、そこに「絶対的無謬」の属性を有している人物は存在しないことが判明する。逆に、11代イマームの兄弟ジャアファルのような、素行の悪さが目立つ者さえいる。この現状から判断すると、「無謬なイマーム」として承認されうるのは、ガイバの状況にあるハサンの息子しか考えられない。従って、ハサンの息子は確実に誕生しており、ガイバの状況下にあることが必然的帰結として導き出されるというのである。

第二の論法は、ガイバ論の位置付けに基づく方法である。トゥースィーは、ガイバの議論をイマーム論に付随した派生的、副次的議論と考える。それは第一の論証から明らかなように、イマーム論の枠組みからみればハサンの息子の存在は必然であり、その人物が公に姿を現していない実状と矛盾しない存在様態としては、お隠れ(ガイバ)しかないことは当然のこととなる。従って、ガイバの議論は、ハサンの息子のイマーム性を確証した後になされるべきものと

なる。その意味で、彼をイマームと認める可能性のない者、つまり同派のイマーム論そのものを否定するスンナ派等に対しては、まずイマームそのものの正当性が議論されなければならず、それは過去11人全てのイマームの正当性の議論にまで遡るものになってしまう。そのため、ガイバ論はハサンの息子をイマームとして認めうる者のみを対象とするものとなるのである。ガイバの議論を行う対象としてトゥースイーが考えているのは、同じようにガイバを伴うイマームの存在を主張しているカイサーン派⁽¹⁸⁾、ナーウース派⁽¹⁹⁾、ワーキフ派⁽²⁰⁾と、11代イマームのイマーム位を主張し続ける者や、ハサンの兄弟ムハンマドやジャアファルをイマームとする者など少数派に限定される。そして、トゥースイーはこれら他分派の主張を論破することで、ガイバに関して唯一正しいのはハサンの息子のイマーム位を支持する自派のみであるという結論を導きだそうとする。

トゥースイーは、カイサーン派、ナーウース派、ワーキフ派の主張の無効性を、以下の理由から結論づける。

カイサーン派 ①ムハンマド・イブン・ハナフィーヤへの明白な指名とイマームへの任命がなされていない。

②逆に、アリー・イブン・フサインへの明白な任命があったことが知られている。

③この派がその後消滅したことが主張の無効性を裏付けている。

ナーウース派 ①ジャアファル・サーディクの死は明白である。

ワーキフ派 ①ムーサーの死は明白である。

②リーダーへの遺言があったことが知られている。

③ワーキフ派の伝承は否定すべきものである。

④ワーキフ派の主張を最初にした者たちは現世的利益を追求する者たちだった⁽²¹⁾。

⑤リーダーのイマーム性を証明するような奇蹟が存在している。

11代イマームの兄弟ムハンマドのイマーム性の主張については、そのような主張をする者が消滅していること、ムハンマドが10代イマームの生前に夭折していることを根拠に否定される。その他、ハサンの子供はこれから誕生するという説、ハサンが死後生き返るとい説、ハサン以降イマームは存在しない等の奇説は、イマーム不在の空白期間ができてしまうことから否定される。ハサンの兄弟ジャアファルとその息子アブドッラーのイマーム性に関しては、彼らの素行の悪さがイマームの無謬性と矛盾すること、2代イマーム、ハサンと3代イマーム、フサイン以降は兄弟間にイマーム位が継承されることはないという理由から否定される。

そして、イマーム性とガイバを容認する全ての他派の主張が否定された結果、12代イマームとされる人物は、ハサンの息子でしかありえないことが導き出されている。

トゥースィーはこの二つの論証に基づき、ハサンの息子のイマーム性は確定しており、我々に明らかになっていないが何らかの理由でイマームはガイバの状態にあると考えるのが最も適切であると結論づけている⁽²²⁾。

4 反論への回答

以上のような自らの見解の後に、トゥースィーはこれらに対する反論を取り込むが、それらに回答することで同派のガイバ観をよりいっそう明確なものにしようとする。

主な反論は次のようなものである。

- ①ガイバの状況では被造物にとって不利益な事態がおこる。
- ②ガイバはイマームが常に必要であるということと矛盾している。

- ③ガイバと非存在は同じである。
- ④ガイバの理由が明白でないのはおかしい。
- ⑤イマームへの脅威は以前にもあったが、過去のイマームたちはガイバの状態にならなかった。
- ⑥イマームがガイバの状態では真理にたどりつけるのか。
- ⑦12代イマームのガイバはガイバの慣行から逸脱している。
- ⑧12代イマームの寿命は長すぎる。

これらに対し、トゥースィーは次のように回答している。

第一に、イマームがガイバの状態になることで起こる被造物の不利益は、イマームと直接接触できないことや彼に対する畏怖の念がおこらないことから生じるものであり、結果として神の恩寵 (lutf) が侵害されることであると解釈される⁽²³⁾。ここでの「神の恩寵」とは、イマームが人々の前に現れその権能を十分発揮することを意味している。そしてこのような神の恩寵を成立させるのは、「イマームの存在」に対する神の関与、「イマーム性の重責を担うこと」に対するイマーム自身の関与、「イマームの援助とイマームへの服従」に対する我々被造物の関与の三つの関与の存在であるとトゥースィーは説明する。そして彼の説明によると、現在神の恩寵が侵害されているのは、神やイマームに責任のあることではない。イマームが人々の前に現れることを阻害したのは、第三の関与、つまり、我々被造物の関与が果たされなかった結果とされるのである。トゥースィーは、この状況を神認識の問題と類比して考えている。神認識のない者（不信仰者）は、神を認識しないが故にそこからの恩寵に浴することができないが、それは神のせいではなく、不信仰者自身の責任なのである。イマームのガイバにより被造物に不利益がもたらされるのは、これと同様、我々自身に責任のある問題としてガイバの状況にあるイマームとは切り離して考えられている⁽²⁴⁾。

第二に、イマームはたとえガイバの状態にあったとしても、それはイマーム

からの直接的影響がないというだけで、被造物側がイマームを必要とすること事態は変わらない。このため、ガイバとイマームの必然性は矛盾しないものとされる⁽²⁵⁾。

第三の反論も否定される。ガイバの状況とは、前述の神の恩寵を成立させる三つの関与の中で、我々の関与がない場合に起こる状態のことである。他方、イマームの非存在とは、三つの関与のうちの神の関与が存在しない状態のことであり、これとガイバの状況とは根本的に異なるものとみなされる⁽²⁶⁾。

第四の反論に対しては、トゥースィーはガイバの理由を云々する必要性をあまり認めていない。12代イマームのイマーム性が第一章の議論に基づき確定されれば、その様態としてのガイバも正当なものと考えられるのである。そのため、ガイバの理由についての議論は些末な枝葉末節の議論とされ、それについての言及が回避される⁽²⁷⁾。

第五の反論に対しては、12イマーム・シーア派の一致した見解として、12代イマームは以前のイマームにはない危機的状況にあったと考えられ、彼らの状態とは区別される⁽²⁸⁾。かつてのイマームたちもカリフの命によりアッバース朝の官吏の監視下で軟禁状態におかれることが多く、彼らは全員毒殺されたという意見も存在している程である⁽²⁹⁾。その意味では過去のイマームたちも同様な危機的状況にあったといえる。これに対し12代イマームは、彼らにはなかった特別の使命のために、かつてない生命の危機に直面していると考えられている。11代イマームは臨終の際にもアッバース朝の派遣した官吏やカーディーに見張られ、女性たちは妊娠の有無が長期に渡り検査された。このような状況下にあっても、その存在を知られることなく生き残ることができたのは、ガイバの状態を続けたからとみなされる。彼がこのように危機的状況をガイバによって回避するのは、マフディー⁽³⁰⁾としての使命を完遂させるためであるとトゥースィーは言う。マフディーが預言者の一族から出、諸国家を消滅させ、唯一の勝利者として世界を支配し、正義と公正を地上に満たすという認識はイスラ-

ム世界に広く知れ渡っていた。そして、12人目のイマームがそのマフディーであるということも判明していたために、彼の誕生が調査され、必死で搜索された⁽³¹⁾。イマームが出現するのは、そのような危機的状況がなくなった時であるが、それがいつなのかは量り知れないこととされている。

第六の反論に対し、トゥースィーは真理を知性的なもの ('aqli) と啓示的 (sam'i) なものに分け反論する。前者はイマームの指示により獲得され、後者は預言者とイマームの言葉による説明から得られる。そして、イマームの直接の指示がなければ真理に到達できないという状況がある場合にはイマームは必ず出現する。それ以外の場合にはイマームの直接の指示が無ければ真理に到達できないことはありえないと考えられる⁽³²⁾。

第七、八の反論に対して、トゥースィーはイマームと同様に誕生した時からガイバの状況にあった人物や、常軌を逸した状況下にあった人物、その他の長寿者の事例を引き合いに出している。誕生からガイバの状況にあった人物として、カイホスロー、イブラーヒーム、ムーサーが挙げられ、常軌を逸した長さのガイバの状態となった者として、キドル、ユースフ、ユヌス、洞窟の民、ロバの所有者が挙げられている⁽³³⁾。そして、彼らの事例が受け入れられている以上、12代イマームのガイバも慣行から逸脱したものとして排除されることはない結論づけられている⁽³⁴⁾。

5 伝承によるガイバの論証

トゥースィーの伝承の利用の仕方は二つに分けられる。一方は、確実な伝承を基にしてガイバの論証を行うという積極的なものであり、トゥースィーはそこに一定の有効性を見いだしている。その具体的な試みが第一章の最後にみられる。そこに利用されている伝承は、「イマームは12人である。」⁽³⁵⁾ことを示すものと、「マフディーは預言者の一家から出現する。」というものである。これ

らの伝承は、スンナ派、シーア派双方から正しいと認められているものである。トゥースィーはこの伝承に「最後のイマームはガイバする。」という伝承と、「マフディーはフサインの子孫である。」という伝承をそれぞれ補って考えるよう促す。そして、それぞれの伝承で言及されている人物の可能性のある者としてワーキフ派などの他分派の主張を再考する。彼らの主張は先に述べたような理由により再び却下され、彼らのイマームはこの伝承の示す人物でないことが再確認される。その結果、この二つの伝承の指示するのはガイバの状態にあるハサンの息子しかありえないという結論に到達するのである⁽³⁶⁾。

また、イマームの年齢の問題についても全面的に伝承に依拠した論証が行われている。トゥースィーは、イマームの年齢について、256年に誕生し、父の死亡時には4歳だったという事以外、具体的な年齢についての換算や考察を一切無駄であるとする⁽³⁷⁾。イマームの年齢を表す伝承は多数存在する。それらの述べるイマーム出現時の年齢は30歳、40歳など様々であるが、それらの述べているところは「強靱で活力にあふれている」ということ以上の意味はないとして、伝承の相互矛盾性の問題を回避する。その根拠として、次のような事例を何百年も生きた人物が若い姿でいることを伝えるものとして提示する。

- ・イブラーヒームは120歳まで生き、30歳の姿で現れる
- ・最後の時の主（イマーム）の若者の姿での帰還はユーススに似ている。
- ・神はヌーフ同様この命の主（イマーム）の寿命を延ばした。
- ・ズライハは若返った後にユースフと結婚した。
- ・ろばの所有者は100年の眠りの後蘇った。

これらのクルアーンなどから広く知られている人物の例を具体的に挙げた後は、イマームの寿命に対する他派の反論への回答と同様の経過をたどりイマームの長寿の正当性に至る。

以上のような議論で利用される共同体全体に正しいという合意が認められている伝承はごく限られたものである。それに対し、トゥースィーをはじめガイ

バ論で利用される伝承の大半はシーア派内のみの承認を得られたものか、またはそれに準ずるものにすぎない。そのような伝承の利用法が以下のものである。これは従来の伝承集の形のガイバ論にみられる方法であり、イマームのガイバの具体的な内容を詳細に説明するような伝承を多数提示するという方法となる。ヌウマーニーやイブン・パーブーヤのガイバの書における大半の伝承が、「ガイバ」という概念の定義付けをするものとして機能すると同時に、それらの伝承自体がイマームや預言者の口を借りてガイバの正当性を主張するようなものであった。

これに対しトゥーシーは、そのように全面的に伝承にのみ依拠するガイバ論を否定している。というのも、このような伝承の利用法では、伝承で語られている内容からイマームのガイバを成立させ組み立てることになるため、伝承の具体的な内容に極端に重点が置かれることになる。しかし、それらの伝承は個々別々に無秩序な情報を雑多に含んでいることが多く、伝承相互間での矛盾も頻繁に起こる。そのため疑問の声が上がりやすくなり、ひいてはそれらがイマームのガイバそのものの無効性の根拠となる危険性を孕んでいるためである。

トゥーシーはこのような伝承の利用方法の弱点を、ワーキフ派の依拠する伝承を詳細に分析することで明らかにしている。彼はワーキフ派の伝承解釈に鋭い批判を加え、彼らとは全く異なる解釈をしてみせる。そうすることで伝承の内容のみからガイバの正当性の根拠を見いだそうとする主張の弱さを暴露し、彼らの伝承に基づく主張を完全否定する。彼はそのような伝承観を次のように述べる。

我々は彼（ムーサー）の死についてこれらの伝承を必要としない。彼の死はその父祖たちの死と同様、当然知られていることであり、そこには何の疑いの余地もない。彼の死を疑う者は、彼の父祖たちや我々が知っている全ての死に対して疑いを抱く者である。我々がこれらの伝承（ムーサーの死を伝える伝承）を提示したのは、この（死についての）知を確認する

ためである。それはちょうど、知性やシャリーア、クルアーンの外面的意味、イジュマーなどから判断されることについても多くの伝承を引用することがあるのと同じ事で、確認の意味で伝承に言及したまでである。また、ワーキフ派が用いているのは全て明証に裏うちされないアーハードな伝承であり、その信憑性を認めることはできない。さらに、その伝承者たちは欠点が指摘されるような人物であり、彼らの主張や引用は信頼できないのである⁽³⁸⁾。

自らがワーキフ派に対して行ったものと同様の批判を招きかねないこのような伝承の利用法の有効性を、トゥースィーは次のように説明している。彼はそれらの伝承の内容そのものよりも、それらがハサンの息子の誕生以前からガイバを予告していたという点に注目すべきであると説く。過去に現状を予告し、そこで予告されたことが現実化したような伝承は、たとえアーハードなものであったとしても、不可知なものの知者に由来すると考えることができると彼は言う。そして、トゥースィーはそのような伝承を、その語り手の正しさを保証するものとみなす。ちょうどクルアーンにおける未来の予言とその現実化が、ムハンマドの預言者としての正当性を保証するものであるのと同じと考えるのである⁽³⁹⁾。

さらにトゥースィーはこれらの伝承を二種類に分けて考えるよう促す。ひとつは、神の属性や過去の既存の事実などに関する伝承のように、内容の変更があり得ない伝承であり、もう一方は、種々の状況の変化によって神が被造物に与える福利が変化し、その結果、伝承の内容が変化する可能性のある伝承で、これは未来のことについての伝承となる。12代イマームに関わることは、全て彼が再臨してから明らかになると考えられているために、それらが過去に起こったことであっても未来に関する伝承とみなされている。これらの記載されている情報が状況の変化とともに変わる可能性があるような伝承については、伝承者の性質からその信憑性を推し量ることは可能であるが、基本的には今後の何

らかの確証の登場をもって初めての確な判断を下すことができるとトゥーシーは判断する⁽⁴⁰⁾。そして、伝承の相互矛盾や理解不能性にもかかわらずそれらをガイバ論に導入する理由を、議論が論理一辺倒になることを嫌う「現実現象面を重視する者」や「伝統的立場を重視する者」を納得させるため、それはあくまでも参考程度、補足的なものにすぎないという消極的な説明をしている⁽⁴¹⁾。

この意味でトゥーシーが引用した伝承には以下のようなものがある。これらの大半がそれまでのガイバ論において頻繁に利用されてきたものであるが、そこには自らの伝承観から大きくはずれることがないようトゥーシー独自の操作がみられる。

1) イマームの目撃証言

イマームの目撃証言は二つに分けられている。一方は、遭遇した人物、自らが対話した人物が12代イマームと分かっている場合の目撃証言である。最も有名なものは、11代イマームの叔母ハキーマ **Ḥakīmah bint Muḥammad b. ‘Alī al-Riḍā** によるイマームの誕生の様子を伝える伝承である。イマームの誕生は、変化する可能性のない過去の事実であると同時に未来まで判然としない事態でもある。そのため、それを扱った伝承の信憑性は伝承者の性質に求められることになるが、ハキーマは、イマームの血縁ということからイマームに準ずる権威をもつものと考えられる。その意味でも彼女の伝承は十分信頼できるものに数えられる。さらにトゥーシーは彼女に依拠する伝承を異経路で5つ引用し、ハキーマの伝承がムタワールであることを示すことでも伝承の信憑性を確保しようと試みている⁽⁴²⁾。

ハキーマの証言を補足するものとして、アフマド・イブン・ビラール **Aḥmad b. Bilāl b. Dāwūd al-Kātib** という人物の母親の話が伝えられている。彼女の夢枕に美しい男性が立ち、隣人からの使者が彼女を呼びにくることを告げ

る。するとその通りになり、彼女がその使者についていくと、隣人の家での出産に立ち会うことになる。彼女はそこにいたもう一人の女性とともに出産を介助する。その後子供が生まれると彼女は報酬を受け取り、そのことを秘密にするよう命じられたというものである⁽⁴³⁾。

誕生直後の12代イマームの様子を目撃したと証言するのは、11代イマームのもとにいた使用人たちである。ナスィームとマルヤムという使用人は、イマームが生まれ落ちた際に膝をつき天を人差し指で指さし、神と預言者とその一家を称えたことを伝えている⁽⁴⁴⁾。また、ナスィームは、誕生10日後のイマームのもとでくしゃみをした際、イマームがくしゃみの功德を説いたことも伝えている⁽⁴⁵⁾。

その他、あるペルシャ人、アムル・アフワーズィー、使用人ザリーフ・アブー・ナスル、カーミル・イブン・イブラーヒーム・マダニー、アブー・ハールーン、ウスマーン・イブン・ウマリー、ムハンマド・イブン・ウスマーン等によるイマームの目撃証言が多数引用されている⁽⁴⁶⁾。

トゥースィーが伝承の内容そのものに重点を置かない傾向にあったとしても、イマームを直接目撃したという証言はかなり重要なものといえる。イマームの誕生を信じた場合、その具体的イメージを想起させるものは、イマームの周囲にいた彼らの証言しか存在しないからである。そして、その際注目されるのは、トゥースィーの引用した証言の内容が、それ以前のガイバの書におけるものと微妙に変化している点である。

その一例はハキーマのイマーム誕生についての証言に関する伝承である。トゥースィーの引用した伝承の内容は以下のようにまとめられる。

彼女は、255年シャアバーン月半ば（ラマダーン月半ば）、11代イマームからその夜次のイマームが誕生することを聞き、屋敷に招かれる。イマームの母親はサウサン（ナルジス）という女奴隷である。やがて夜も更け、明け方近くなってもサウサン（ナルジス）に陣痛の気配がなく、ハキーマはイマームの誕生に

懐疑的になる。しかし、11代イマームに諭され改心する。やがてサウサン（ナルジス）に陣痛がおとずれ、ハキーマは出産を介助する。そしてイマームが誕生する。直後、イマームは父親の膝にまっすぐ座り、クルアーンの開扉章、28章5節を唱え、イマーム全員に対して祈った。3日後、ハキーマは再び11代イマームのもとを訪れたが、赤ん坊の姿はなかった。11代イマームは、彼をムーサーの母がムーサーを託した者に託したと説明した。7日後に11代イマームのもとを訪れると、赤ん坊が連れてこられた。12代イマームは、神の唯一性を証言し、28章5節を唱える。（3日後という伝承もある。）40日後にハキーマは再びイマームのもとを訪れた。その時、12代イマームは既に歩いていた。11代イマームは、イマームの成長が普通の人々とは異なると説明する。その後ハキーマはイマームと会うことはなかった。

これに対し、イブン・バーブーヤの引用しているハキーマの証言は次のような点で異なるものである。

- イマームの母親はナルジスである。
- 255年という年の記載がない。
- ハキーマがナルジスの出産を介助する具体的記述がない。
- 出産時にハキーマがクルアーンの章句を暗唱すると、胎児がそれに応えて語った。
- 胎児の言葉に驚いている間にナルジスの姿がみえなくなり、再び現れた時にはイマームが誕生していた。
- イマームの頭上には鳥がはばたいていた。
- 11代イマームはその鳥に赤ん坊を連れ去り、40日毎に戻すよう命じる。
- ハキーマはその後も11代イマームが亡くなるまで40日毎にイマームに会い続けた⁽⁴⁷⁾。

同一の内容を伝える二者の伝承のこのような差異は両者の立場の違いを明確に示している。イブン・バーブーヤのガイバ論はガイバの神秘的側面を強調す

る傾向をもち、イマームの誕生に種々の奇蹟的な状況を付与する伝承を利用するのに抵抗がない。イブン・バーブーヤは、イマームの母がローマの王とイサーの血縁であったこと、夢を介して11代イマームと交流していたことなど、イマームにまつわる物議の情報も多数提供している⁽⁴⁸⁾。

それに対しトゥースィーは伝承の証言能力の方を重視し、イブン・バーブーヤ等により多数利用されてきた非現実的な要素を多分に含んだ伝承を排除している。誕生の際に奇蹟的行為があったことを否定しないまでも、極力それらが強調されることのないような伝承を利用するのである。

しかし、伝承者がイマームと気づかず彼と出会い、その後、彼が12代イマームであることを悟るという形式の目撃証言においては、トゥースィーも非現実味のある伝承を多少なりとも引用せざるをえない状況になり、イブン・バーブーヤなどの引用した伝承も多数取り入れる⁽⁴⁹⁾。これらはイマームの目撃証言であると同時に、イマームの奇蹟を証言するものとして機能し、そのため内容も神秘性が強いものとなっている。この種の目撃証言は以下の人物が伝えている。

*al-Āwidi

Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Qummi

Yūsuf b. Aḥmad al-Ja‘fari

Aḥmad b. ‘Abd Allāh al-Hāshimi

*Abū Na‘īm Muḥammad b. Aḥmad al-Anṣārī

*‘Alī b. Ibrāhīm b. Mahziyār al-Ahwāzī

*Muḥammad b. Ismā‘īl b. Mūsā b. Ja‘far

*Ibrāhīm b. ‘Abīdah al-Nisābūrī

*Ibrāhīm b. Idrīs

*Abū ‘Alī b. Muṭṭahar

Abū Sūrah Muḥammad b. al-Ḥasan b. ‘Abd Allāh al-Tamīmī⁽⁵⁰⁾

al-Zuhri

Abū Sahl Ismā'īl b. 'Alī al-Nawbakhtī

Ya'qūb b. Yūsuf al-Ḍarrāb al-Ghassānī

Abū al-Ḥasan Muḥammad b. 'Ubayd Allāh al-'Alawī

Ibn Ukht Abī Bakr al-Nakhālī al-'Aṭṭār

イマームに出会う機会が比較的多いのが巡礼の時、特に、タワーフの際である。タワーフをしている時に美少年に出会い、その少年がイマームであったという伝承が最も多い。これは、「イマームは祭りの際に人々のもとに現れる。彼は人々に気づいているが、人々は彼に気づかない。」⁽⁵¹⁾というジャアファル・サーディクという言葉につながる。巡礼の際12代イマームは、小石を金塊に変えるなどの奇蹟を行い自らのイマーム性を示したり、信者の前で説教を行ったりしている。その他、巡礼以外では、サーマッラーやメッカのイマームの住居での目撃証言がある。

これらの伝承の中にも以前のガイバの書には見られない新たな情報をもたらす伝承が取り込まれている。中でも11代イマームの臨終の様子を伝えたナウバフティーの伝承は注目に値するものといえる。

(アブー・サフル・イスマーイール・イブン・アリー・ナウバフティーが語った。) 私はアブー・ムハンマド・ハサン・イブン・アリーの臨終の床を訪れ、彼の側にいた。彼(11代イマーム)はヌビアの黒人であったのはハサンの父のアリー・イブン・ムハンマドに仕えていた使用人のアキードに言った。「アキードよ、乳香入りの水を沸かしてくれ。」そこで彼は水を沸かし、それを女奴隷でハサンの後継者の母であるサキールがもってきた。彼(11代イマーム)はその水椀から水を飲もうとしたが、手が震え、椀は彼の口元から落ちてしまった。そこでアキードに言った。「家に入って、礼拝をしている少年を連れてきなさい。」…少年は彼の前にくると挨拶した。彼は光り輝いており、髪は波打ち、歯も生えていた。ハサンは彼を見ると泣いて言った。「ムハンマドの一家の長よ。私に水を飲ませておくれ。」

私は私の主のもとに行くのだ。」その少年は沸かし湯を椀に汲み、口にふくみそれを飲ませた。ハサンはそれを飲むと言った。「私の礼拝の用意をなさい。」少年は布を部屋にかけ、彼の身体を少しずつ沐浴させ、頭と足を拭いた。するとアブー・ムハンマド（11代イマーム）は言った。「喜べ、息子よ。お前は最後の時の主であり、マフディーであり、地上における神の証しであり、私の息子であり、私のワスィーである。私はお前の父であり、お前はムハンマド・イブン・ハサン・イブン・アリー……イブン・アリー・イブン・アビー・ターリブである。神の使徒がお前を産んだのである。お前は清浄なるイマームの封印である。神の使徒がお前のことを伝え、お前のイスマをつけ、お前のクンヤをつけた。それらを私は父祖たちから伝え聞き、その約束を守った。我々の主は称えられる強きお方である。」そしてハサン・イブン・アリーは間もなく亡くなった。彼ら全員に神の恩寵あれ⁽⁵²⁾。

ここでは、12代イマームの存在、11代イマームによる明確な指名、彼がマフディーであること全てが証言されている。にもかかわらず、この重要な伝承はそれまでのガイバ論にはみられないもので、トゥースィーが新たに「発見」し、採用したものである。この類の伝承を羅列することの欠点を熟知していたにも関わらず、新規の情報を伝える伝承を追加した点に、イマームの指名を裏付ける定石である遺言形式の伝承をガイバ論に加えることでこのイマームのイマーム性を補強しようというトゥースィーの意図が看取される。

これらの目撃証言に続いて引用されているのは、イマームの書簡についての伝承である。目撃証言の中にはイマームの魔術的な奇蹟を示すものも存在したが、基本的にトゥースィーは、イマームの奇蹟(mu'jizāt)をイマームの書簡を中心とした信者に対するイマームからの忠告や指示に限定している。トゥースィーは、それらの手紙が「不可視の事柄 ghayb や未来のことなど、通常の出来事でないものを扱ったもの」で、そこには通常の忠告や勧告以上に神兆として機

能する要素があると指摘する⁽⁵³⁾。そして、そのイマームの語った通常の出来事でないことが言葉通り現実化した時、イマームの言葉は奇蹟とみなされ、その奇蹟の実行者であるイマームの正当性が証明されると結論づけている。

トゥースィーが引用したイマームからの手紙は、次のようなことに関するものである。

- ・イマームに渡される金品の量や額を予告する。
- ・イマームへ手紙を出した者の真意を汲みとり、伏せて置いた状況への回答を行う。
- ・これから生まれる子供の予告⁽⁵⁴⁾
- ・死の予告
- ・イマームへの懷疑への忠告
- ・神学的な問題に対する回答
- ・サフィールへの命令

2) イマームの側近についての証言

トゥースィーのガイバの書における伝承利用の特徴として次にあげられるのが、ガイバ当初の派内の代表的人物の評価に伝承を利用している点である。トゥースィーは、イマームの言葉を根拠にガイバ前後のイマームの側近たちを名指しし、彼らを「賞賛される者」と「非難される者」とに分けている。これはそれまでのガイバ論にはみられない新しい試みである。トゥースィーの挙げているのは以下の人物である。

- ・ガイバ以前で賞賛される側近

Ḥimrān b. A'yan

al-Mufaḍḍal b. 'Umar

al-Ma'allī b. Khanīs

Naṣr b. Qābūs al-Lakhmī

‘Abd al-Raḥmān al-Ḥajjāj

‘Abd Allāh b. Jundab al-Bajālī

Ṣafwān b. Yahyá

Muḥammad b. Sinān

Zakariyá b. Ādam

Sa‘d b. Sa‘d

‘Abd al-‘Azīz b. al-Muhtadī al-Qummī al-Ash‘arī

‘Alī b. Mahziyār al-Ahwazī

Ayyūb b. Nūḥ b. Darrāj

‘Alī b. Ja‘far al-Humānī

Abū ‘Alī b. Rāshid

Īsá b. Ja‘far b. ‘Āsim

Ibn Banāḍ

・ガイバ以前で非難される側近

Ṣāliḥ b. Muḥammad b. Sahl al-Hamdānī

‘Alī b. Abi Ḥamzah al-Baṭā‘īnī

Ziyād b. Marwān al-Qindī

‘Uthmān b. Īsá al-Rawwānī

Fāris b. Ḥātim b. Māhawiyah al-Qazwīnī

Aḥmad b. Hilāl al-‘Ibraṭā‘ī

Abū Ṭāhir Muḥammad b. ‘Alī b. Bilāl

・ガイバ期で賞賛される側近

Abū ‘Amr ‘Uthmān b. Sa‘īd al-‘Umarī

Abū Ja‘far Muḥammad b. ‘Uthmān b. Sa‘īd al-‘Umarī

Abū al-Qāsim Ḥusayn b. al-Rūḥ

Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Muḥammad al-Sammārī

・ ガイバ期で非難される側近

Abū Muḥammad al-Sharīʿī

Muḥammad b. Nuṣayr al-Numayrī

Aḥmad b. Hilāl al-Karkhī

Abū Ṭāhir Muḥammad b. ʿAlī b. Bilāl

al-Ḥusayn b. Manṣūr al-Ḥallāj

Abū Jaʿfar Ibn Abī al-ʿAzāqir al-Sharmaghānī

Abū Bakr al-Baghdādī

Abū Dalaf al-Majnūn

側近の名を上げ、それぞれの評価に関する伝承を提示することには、以下のような利点が考えられる。第一に、そこから当時の側近たちの状態を把握し、正しい人物評価をすることができる。彼らの評価が確定されれば、正しいと評価された人物が伝えた伝承や、彼らに関わった事態の信憑性が増す。それは、たとえ参考、補足的なものに留まるとしても権威をもつものとなり、結果的にはイマームのガイバの正当性の根拠として利用できる余地が生まれるのである⁽⁵⁵⁾。

第二に、クレム V.Klemm も指摘するように、これらの側近たちの評価の中で初めて小ガイバ期の4人のサフィールについての本格的な言及が多数行われている⁽⁵⁶⁾。トゥースィーは、ウマリー家とナウバフト家の血統のイブン・バルニーヤ Abū Naṣr Hibat Allāh b. Aḥmad b. Muḥammad al-Kātib の情報をもとに、ガイバ期で賞賛される側近として4人のサフィールを全面的に支持する姿勢を明確にした⁽⁵⁷⁾。彼らが「イマームの代理人」であることがイマームの口を通して宣言され、イマームの命が彼らに伝えられることが明らかにされている。彼らをイマームの代理人としてガイバ期の派内の最高権威に位置づけることにより、彼らの伝えた伝承の正当性も確保される。と同時にイマームのガイバの規定がより明確になるのである。

4 まとめ

トゥースィーのガイバ論は、10世紀来の伝統的な伝承重視の立場と新たな理性重視の立場の中庸をいく彼の立場をよく反映したもので、12イマーム・シーア派のガイバ論の完成図と評価されている。その特徴は、10世紀後半から伝統的に行われてきた伝承集の形でのガイバ論を放棄した点にある。伝承集の形でのガイバ論では、イマームのガイバの開始時期やその理由、ガイバの期間、イマームの出現後の終末論的世界像など、ガイバの詳細を規定することが中心となっていた。トゥースィーはそのようなガイバの概念規定に終始するガイバ論を避け、ガイバをイマームの必然性とその無謬性の原理に裏打ちされた必然的概念ととらえるための理性に基づく議論を展開させた。そして、ともすれば非現実的で神話の様相を呈し、現実の社会における信者の生活から遊離しがちなガイバという観念を、イマーム論の枠内で明確にとらえうるものとみなし、その中で正当化の道を示そうとした。

この姿勢は、多用な伝承を駆使しガイバの神秘性を強調したイブン・バーブーヤのガイバ論とは正反対のものといえる。従って、避けて通ることのできない伝承の利用の仕方も彼らとは異なるものとなる。

トゥースィーの引用する伝承は二種類に分類される。一つは、イマームや預言者に依拠するイマーム論自体に関わる伝承で、既にシーア派内でそれらに対する正当な評価が得られているもの。そして特にウンマ全体にも認められうるものを利用することが配慮されている。もう一方は、それ以外のガイバの詳細事項に関する史実に言及し、ガイバの詳細な内容を補足したり、それらの確定性を保証する証言の役割を果たすような多数の伝承である。以前のガイバ論では、ガイバの詳細な概念規定に関するような伝承もイマームや預言者に依拠するものが多数採用されていた。一方トゥースィーのガイバ論では、それらの割

合が減らされ必要最小限度に抑えられている。代わって、イマームや預言者以外からの伝承の割合が大きくなっている。それらは、当時の一般信徒たちの言葉の記録であり、ガイバ中にイマームを目撃したというものや、イマームからの手紙を受け取ったという内容のものである。この二者はトゥースイーの伝承区分に対応するものといえる。前者は内容の変化の可能性のない伝承であり、後者は条件や状況の変化により内容が変化する可能性を含むものである。トゥースイーは、前者の伝承をガイバの正当化の論理的論証に用い、後者を存在を無視するわけにはいかないあくまでも補足的なものとして使用している。

後者に区分された伝承の信頼性を高めるための措置としては、伝承者や伝承に登場する人物たちの信頼度を客観的に評価する基準をガイバ論の中に組み込んでいる。ガイバ期の派内の権威を明確にすることで、それを彼らの伝える情報の信憑性と結びつけようとする。と同時に、その中の 4 人をイマームから指名を受けた代理人として特別視させる効果も期待されている。彼らの美德を浮き彫りにする伝承を多数掲載することで、彼らから口伝された伝承の正当性を確認するとともに、彼らをガイバの規定そのものに組み込んだ小ガイバ期の規定を正当化しようとしたのである。

- 1 12イマーム・シーア派の教義では、12代イマームは255/868-869年、または、256/869-870年のシャバーン月半ばに誕生したといわれている。トゥースイーは、後者の日付を採用している。al-Shaykh al-Ṭā'fah al-Ṭūsī, *Kitāb al-ghaybah*, Qumm : Maktabat baṣīrātī, 2nd ed., 1408 AH, p.258 (以下 al-Shaykh al-Ṭā'fah al-Ṭūsī は al-Ṭūsī, *Kitāb al-ghaybah* はKGと略記)
- 2 シーア派系諸集団の中で最初にガイバを主張したのは、初代イマーム、アリーの息子ムハンマド Muḥammad b. al-Ḥanafīyah (d.81/700-701) に対するカイサーン派と考えられている。その後、この派からの転向者たちによりガイバの主張が分散し、ムギーラ派、ナーウース派等がそれぞれの支持するイマームに対してガイバを主張した。それらの集団の中でも12イマーム・シーアに最も大きな影響を与えたのが、7代イマーム、ムサーのガイバを主張したワーキフ派である。その他、シーア派

- ながらも政治的成功をおさめたファーティマ朝のイスマール派も独自のガイバ論を展開させている。 al-Nawbakhtī, *Firaq al-shī'ah*, Bayrūt : Dār al-aqwa', 2nd ed., 1984, pp.29-36, 62-68, 80-83
- 3 11代イマーム、ハサンの支持集団の中には、従来型のように彼の死を否定し、お隠れを主張する者も存在したが、ごく少数であり、トゥースィーの時代には消滅していたようである。 al-Ṭūsī, KG, pp.131-132
- 4 A.A.Sachedina, *Islamic messianism*, Albany : State University of New York Press, 1981, p.109
- 5 トゥースは現在のマシヤドを中心とする広範な地域を示す地名であるため、彼の出生地は詳細に確定することができない。
- 6 彼の生涯や足跡については、 Muḥsin al-Amīn, *A'yān al-shī'ah*, Bayrūt : Dār al-ta'āruḥ lil-maṭbū'at, 1986, vol.9, pp.159-167 ; al-Khuwānsārī, *Rawḍāt al-jannāt*, Tihrān : Naṣīr-i Khusruw, 1390 A.H., vol.6, pp.216-249 等参照。
- 7 al-Ardabīlī, *Jāmi' al-ruwāh*, Bayrūt : Dār al-aqwa', 1983, vol.2, p.95
- 8 A.A.Sachedina, *The just ruler in Shī'ite Islam*, Oxford: Oxford University Press, 1988, p.9
- 9 代表的な著作である *al-Mabsūṭ*, *al-Nihāyah*, *al-Uddah fi-uṣūl al-fiqh* はムルタダー、ムフィードの立場を忠実に踏襲した法学、法源学についてのものである。その他、 *Talkhīs al-shāfi*, *Tamhīd al-uṣūl* 等、ムルタダーの著作の注釈なども残されている。
- 10 ムフィードはバグダードのウスリー、彼の先人イブン・バーブーヤはライのアフバーリーと評価される。 W.Madelung, "Imamism and Mu'tazilite theology," in *Le Shī'ism Imamite*, Paris: Presses Universitaires de France, 1968, p.22 彼らの間に立つトゥースィーの編纂した法学伝承集 *Tahfih al-aḥkām*, *al-Istibṣār* は、シーア派四大法学伝承集に数えられている。
- 11 al-Ṭūsī, KG, p.2
- 12 al-Mufīd, "al-Fuṣūl al-'asharah fi-al-ghaybah," in *Uddat al-rasā'il*, Qumm : Maktabat al-Mufīd, n.d., pp.346-382
- 13 al-Ṭūsī, KG, p.2
- 14 スウマーニー、イブン・バーブーヤのガイバ論については、吉田京子、「ヌウマーニーのガイバ論」、『オリент』第36巻第2号1993年18-33頁、「12イマーム・シーア派におけるガイバ論の形成」東京大学大学院博士論文、1998年参照。
- 15 al-Ṭūsī, KG, pp.3-4
- 16 この命題に関する議論の詳細は、ムルタダーの著作の注解である *Talkhīs*, *Tamhīd*

al-jumal にある。

- 17 al-Ṭūsī, KG, p.15
- 18 ムハンマド・イブン・ハナフィーヤ Muḥammad b. al-Ḥanafīyah (d.81/700-1) の死を否定し、彼のガイバを主張した集団。
- 19 6代イマーム、ジャアファル・サーディク(d.183/799)の死を否定し、彼のガイバを主張した集団。
- 20 7代イマーム、ムサー・カーズィム(d.183/799)の死を否定し、彼のガイバを主張した集団。
- 21 トゥースィーがワーキフ派の最初期の唱道者として挙げているのは、‘Ali b. Ḥamzah al-Batā’ini, Ziyād b. Marwān al-Qindī ‘Uthmān b. ‘Īsā al-Rawwāsī である。ガイバ以前のイマームの側近で非難される人物として彼らに関する伝承が第六章でも引用されている。al-Ṭūsī, GK, pp.42-47, 213
- 22 al-Ṭūsī, KG, pp.56-57
- 23 al-Ṭūsī, KG, p.6
- 24 al-Ṭūsī, KG, p.7
- 25 al-Ṭūsī, KG, p.7
- 26 al-Ṭūsī, KG, pp.12-13
- 27 al-Ṭūsī, KG, pp.57-59 後にイマームの出現を阻害する要因についてトゥースィーは触れ、イマームの出現を困難にしている最大の要因を、イマームが直面していた生命の危機的状況であるとしている。al-Ṭūsī, KG, p.199
- 28 第5章イマームの出現の阻害要因でも取り上げられている。al-Ṭūsī, KG, p.200
- 29 イマームの生涯については、al-Mufīd, *Kitāb al-Irshād*, tr.by I.K.A.Howard, London: The Muhammadi Trust, 1981 参照。
- 30 マフディーについての伝承に関しては、A.J.Wensinck, *Concordance et Indices de la Tradition Musulmane*, Leiden: E.J.Brill, vol.7, 1969, pp.80-81 参照。
- 31 al-Ṭūsī, KG, pp.200-201
- 32 al-Ṭūsī, KG, pp.65-66
- 33 ガイバの状態になった人物として挙げられたこれらの人物は、カイホスロー以外はクルアーンに登場する人物に限定されている。al-Ṭūsī, KG, pp.73-86
- 34 al-Ṭūsī, KG, pp.73-86
- 35 al-Kulayni, *Uṣūl min-al-kāfi*, Ṭīhrān : Dār al-Islāmīyah, 1388 A.H., vol.1, pp.338, 533; al-Nu’māni, *Kitāb al-ghaybah*, Bayrūt : Mu’assasat al-‘alamī lil-maṭbū’at, 1983, pp.41-42, 60-64; al-Mufīd, *Awā’il al-maqālāt*, Qumm: Maktabat al-Dāwidi, 3rd. ed., 1371 A.H.,

p.49 等

36 al-Ṭūsī, KG, pp.87-137

37 al-Ṭūsī, KG, p.258

38 al-Ṭūsī, KG, p.29

39 ムタワーティルなものである根拠として彼のあげている理由は、先人のイブン・パーブーヤの根拠と全く同じものである。al-Ṭūsī, KG, p.109

40 al-Ṭūsī, KG, p.265

41 al-Ṭūsī, KG, p.2

42 トゥースィーが伝えた経路は以下の通りである。

- Ibn Abi Jayyid ~ Muḥammad b. al-Ḥasan b. al-Walid ~ al-Ṣaffār Muḥammad b. al-Ḥasan al-Qummī ~ Abū ‘Abd Allāh al-Muṭṭaharī ~ Ḥakīmah
- 同上 ~ 同上 ~ Muḥammad b. Yahyā al-‘Aṭṭār ~ Muḥammad b. Ḥamawayh al-Rāzī ~ al-Ḥusayn b. Rizq Allāh ~ Mūsā b. Muḥammad b. Ja‘far ~ Ḥakīmah
- Aḥmad b. ‘Alī al-Rāzī ~ Muḥammad b. ‘Alī ~ ‘Alī b. Samī‘ b. Banān ~ Muḥammad b. ‘Alī b. Abī al-Dārī ~ Aḥmad b. Muḥammad ~ Aḥmad b. ‘Abd Allāh ~ Aḥmad b. Rūḥ al-Ahwāzī ~ Muḥammad b. Ibrāhīm ~ Ḥakīmah
- 同上 ~ 同上 ~ Ḥanzalah b. Zakariyā ~ a truthfur man ~ Muḥammad b. ‘Alī b. Bilāl ~ Ḥakīmah
- 大勢の仲間 ~ 長老たち
al-Ṭūsī, KG, pp.141-144

43 al-Ṭūsī, KG, pp.144-146

44 al-Ṭūsī, KG, p.147

45 al-Ṭūsī, KG, p.139

46 中でも、ウマリーとその息子ムハンマド・イブン・ウスマーンの証言は権威をもつ。彼らは初代、2代サフィールであり、イマームから最も信頼される長老に位置づけられていることが明示されている。トゥースィーは第6章で、彼らサフィールの美德と特別な地位の正当性を論証している。

47 Ibn Bābūyah, *Kamāl al-dīn wa-tamām al-ni‘mah*, Qumm: Mu‘assasāt al-nashr al-islāmī, 1984-5, pp.424-430

48 イブン・パーブーヤのガイバ論については、吉田京子「12イマーム・シーア派におけるガイバ論の形成—シャイフ・サドゥークの方言と意義—」, 学位論文, 1998年 参照。

49 口述の人物のうち*で示された者の伝承はクライニーやイブン・パーブーヤにも

みられたものである。

- 50 高名なザイド派長老として知られる。彼の目撃証言は、次章のイマームの奇蹟についての章でも採り上げられている。al-Ṭūsī, KG, pp.181-182
- 51 al-Kulaynī, *Uṣūl min-al-Kāfi*, p.399; Ibn Bābūyah, op.cit., p.440 等。
- 52 al-Ṭūsī, KG, pp.164-165
- 53 al-Ṭūsī, KG, p.199
- 54 アリー・イブン・バーブーヤが子供の誕生をイマームに求め、イマームの祈りの結果、3人の息子が誕生したというイブン・バーブーヤの誕生に関する有名な伝承も採用されている。
- 55 al-Ṭūsī, KG, p.256
- 56 V.Klemm, "Die vier sufara' des Zwölften Imām zur formativen Periode der Zörfersī'a," in *Die Welt des Orients*, Band 15, 1984, p.140
- 57 彼の著作である *Akhbār Abī 'Amr wa-Abī Ja'far al-'Umarīyayn* を引用したアフマド・イブン・ヌーフ Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī b. al-'Abbās b. Nūḥ al-Sayrafi (d. around 410/1019) *Akhbār al-wukalā' al-arba'ah* からトゥースィーに引用されている。